



第97回 演じることと地域医療

はじめてパロディ時代劇を作った。「谷口黄門様が行く」という、まことにおこがましいタイトルだが、ただ趣味で作ったわけではない。患者さんのポリファーマシー(多剤服用)が思った以上に深刻と考え、地域ケーブルTVの啓発動画として作成した。それまでも、インフルエンザや熱中症などの健康講座は収録していたが、雰囲気固くてあまり面白くない。そこで有名なTV時代劇の設定で、ポリファーマシー啓発のための短編動画を作ったのだ。映画監督でもある孫大輔先生に脚本をお願いし、うちの教室メンバー総出演で、プロの撮影チームを入れて撮影した。場所は日野町根雨宿、たたら楽舎など古い建物の並ぶエリアだった。いざ撮影が始まってみると、セリフが覚えられない、思い出そうとすると表情や所作がおろそかになる、演技というのは本当に難しいものだ。撮影の終わり頃には、緊張感と疲れでへとへとになった。

▼ペルソナ

演技を終えて、あらためて考えてみた。脚本の人物を演じることは、意識的に他者を「演じる」ことだ。だが、私たちは日常でたくさんの「演じる」をやっていないだろうか。医師、先生、父親、家族、市民などなど。それぞれの場、それぞれの文脈で、適切な役を演じ分けている。もし急に演技をやめて素顔で応じたら、どうなるだろう。おそらく、「この人は変わった人だ」「空気が読めない」などと言われ、相手にされなくなるかもしれない。私たちは、立場や場に応じて仮面(ペルソナ)をつけている。ちなみにパーソナリティ(人格)はペルソナに由来した言葉だ。さらに、小説家の平野啓一郎は、人間とは分人(ペルソナ)の集合体であるという考え(分人主義)を提唱している。

▼分人を統合する=あなた?

だがいっぽうで、ペルソナの集合体がすなわちあなたという人間です、といわれても、ピンとこない。いろいろなペルソナを使い分けるかもしれないが、核にあるのは唯一無二の「私」である、と思いたい。演じることで適応する、演じないことで不協和音をおこす、いずれも大事な「私の」選択であろう。あえて演じないという意志表明は、自分にとって何か深い意味があるのではないかと思う。そこにこそ、あなたらしさの手がかりがあるように思えてならない。演じることに没頭しすぎると、自らの核を見失い、自分まで欺くようになるかもしれない。日常の中で「演じたくない」一瞬というものがある。そのとき、私はなぜ演じたくないのか、何を守ろうとしているのか、演じることへの問いはつきないのである。



健康啓発動画「谷口黄門様が行く」

YouTube配信中です。

どうぞご覧ください。

(<https://www.youtube.com/watch?v=F4-IvFpHs9I>)



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにぐち しんいち)